

Margriet Schippers,  
*Elizabeth Gaskell, Citizen of the World:*  
*Civic Lessons*

Pallas Publications, Imprint of Amsterdam University Press, 2017, 179pp.  
Paperback €34,95, ISBN: 9-789085-551133

太田 裕子

本書はマルグリート・シッパーズ氏の英国レスター大学での博士論文の刊行書であり、ギaskellの作品の中でとりわけ短篇を網羅しつつ、18世紀の英国非国教会派ユニテリアン理性論者たちの思想をギaskellがどのように作品やその掲載誌、形式の選択などに生かしていったのかを、近代のより良き「市民」形成という目的の観点から論じ、ギaskellの執筆の総合的背景を考察している。

これまで18世紀から19世紀にかけてのユニテリアン作家のネットワークの研究は1990年代以降キャサリン・グリードルやルース・ワッツら社会歴史学者により女性の社会的権利の獲得への関与の面から論じられ、以降ステファニー・マルコビッツやジュリア・サンジュー・リーを始めギaskellの革新性が論じられたが、その中でも短篇と非国教会派の思想との包括的関連付けをした論文は少ない。またジェニー・ユングロウやポーリン・ネスターらが、英米のユニテリアンサークルが慈善、文学、哲学等のネットワークを形成していたことを指摘する中、フェリシティー・ジェイムズやダニエル・ホワイトらは18世紀ユニテリアン詩人アナ・バーボルドやハリエット・マルティノーらの社会改革のための文学の戦略的利用を研究している。

本書序章において、シッパーズ氏はギaskellの作品の思想の中心となる18世紀非国教会派理性論者たちの「市民の義務」についての概念を説明する。リチャード・プライスの『祖国愛についての説教』(1790)では国民一人一人が世界共同体の一員としての「市民」(citizen)であり、その意味をフランス革命後に出現した「市民」とは区別し定義している。18世紀の理性論者たちが設立した青少年教育機関ウォリントン・アカデミーでは「市民の義務」についての講座

もあったが、シッパーズ氏は非国教会の教徒はその著作や啓蒙活動で、市民が「自由」を享受できるよう努める役割があるという自覚があったと述べる。また氏によれば、プライスと同じ非国教会派のジョゼフ・プリーストリーは、市民は日常の事象の因果関係を把握することで判断力が養われ、また歴史を学べばそこに一定の規則性を見出せると主張し、彼の同胞バーボルドは、『市民への説教』（1792）で神の下の人類の国家の市民としての平等と同時に宗教上の平等を説き、それを脅かす政府や国家の罪を許してはならないと説いた。

本書第一章では、1838年から1849年までギヤスケルがハウイト夫妻の下で、彼らの奴隷問題のみならず、社会問題全般に対する革新的な思想に感化され、『ハウイツ・ジャーナル』誌（以下『ハウイツ』誌）や『サーティンズ・ユニオン・マガジン』誌に寄稿したことが晩年に至るまで読者の、市民としての自覚を育てるという大義となったこと、また、夫妻のもとでヨーロッパの情報を知り作品に役立てたことが指摘される。

シッパーズ氏曰く1848年に発行された平等な社会の推進を試みるF・D・モリスの論文や、ギヤスケルにとっての「ヒーロー」であったチャールズ・キングスリーのパンフレットが出回ったこと、封建主義の遺物である長子相続がフランス革命後フランスでは廃止されたことは、ギヤスケルが『ハウイツ』誌に寄稿した「クロプトン・ホール」やその後の「モートン・ホール」、「クローリー城」の背景ともなった。また、ギヤスケルが英国での平等社会実現のために、定期刊行誌を通じての教育を考えたこと示唆する。

ハウイト夫妻の思想のもと、ギヤスケルは神への使命や義務を思い起こし、平和的な手段で社会を変革しようと試みた。その例が「クリスマス——嵐のち晴れ」の執筆であり、社会の平等を推進するため、意見の相違を乗り越えて調和して生きていく共同体を示すという民主主義の根本を描いているとシッパーズ氏は主張する。またハウイト夫妻とその仲間であるマーガレット・ギリスらの、女性が共同で生活を向上させることができるという思想が、ギヤスケルの「リビー・マーシュの三つの祭日」でのエリザベスとマーガレットが女性同士の共同生活を行う、という結末にも表れているとする。

第二章は、1850年以降1856年までに『ハウスホールド・ワーズ』誌に掲載した作品に注目し、ギヤスケルがディケンズ、シャーロット・ブロンテやナイチン

ゲール一家との交流により中流階級の未婚女性の社会問題を、家父長制の弊害と関連させながら、革新的な視点で浮き彫りにしたことを論じている。シッパーズ氏は1851年の作品に注目し、ギヤスケルが「克蘭フォードの私たちの社交界」で、キャロライン・P・フーバーの、家父長制の障害と成り得る社会の思想の底流を提示したという論を発展させている。後の『克蘭フォード』でギヤスケルは家父長制社会において周縁に追いやられた女性たちを同じテーマで描く一方、「貧しきクレア修道女」はディケンズの助言とブロンテの創作力に感化され、市民としての行動や義務についての考察を深めたとする。

この時期ディケンズのギヤスケルに与えた文学的影響は大きく、ギヤスケルもディケンズ同様に英国の過去を顧み、悪しき点を正そうとしたとシッパーズ氏は説く。ハウイト夫妻の下での修行時代同様に、過去の誤りを明るみにし、改革しようとする精神が更に色濃く反映されているとする。例えば非嫡出子の不法な扱いが「リジー・リー」や『ルース』で描かれたが、その他にも『ルース』では、後の『ラドロー卿夫人』同様、中流階級の知的な女性が男性同様職業につき、自立していくことについて描かれ、50年代のハウイト夫妻らとの交流により得た平等精神が底流にあったとする。更に、「ジョン・ミドルトンの心」はキリスト教徒としての使命を忠実に描き、あらゆる人への差別をなくし、差別を犯した罪の赦しをも描くものであった。ユニテリアンは教義上では原罪の考えは否定するものの、シッパーズ氏は、ギヤスケルが描く社会は、「赦し」を重視した社会であるとするとする。

更に『克蘭フォード』と反して、「モートン・ホール」では教育の不十分な女性が陥る社会での孤独を描き、学校で教育を受けたコーディリアの幸福な結末と、信頼できない語り手ビディーの教養のなさを指摘しつつ、ギヤスケルは教育が女性の社会的地位の向上のために必要なこと、また英国社会に蔓延る偏見や迷信を、教育をもって取り除こうとした。シッパーズ氏はギヤスケル自身ディケンズ、あるいは理性論者たちが主張したように、社会を正すことが「市民の義務」であると自覚していたと強調する。

第三章では1853年から1856年の作品を扱い、ギヤスケルが前述の「市民の義務」いう概念を、フランスのモール夫人、フランソワ・ギゾー、ヴィクトル・クーザン、アレクシ・ド・トックビルらのヨーロッパの思想を吸収しつつ更に発

展させたことを論じている。当時、英国での宗教への偏見は激しく、折しもギヤスケルが尊敬していたキリスト教社会主義者フレデリック・デニソン・モーリスが、キングズ・カレッジの教授職を追われるという事件があった。シッパーズ氏によれば、モーリスの「市民権」と「世界主義」(Cosmopolitanism)に関する思想のギヤスケルへの影響は大きく、とりわけ『北と南』で扱われた宗教上の差別とモーリスの事件とは連動していると主張する。

ギヤスケルの短編やノンフィクションなどの作品と時代背景との関連性はこの他にも見られる。例えばギヤスケルがフランスを訪れた1854年1月、マケドニアでギリシャ正教会徒によるオスマン帝国への反政府暴動が勃発し、その後ギリシャ人は英国等の支援を受け独立した。この事件を発端にモール夫人がギヤスケルにクロード・シャルル・フォーリエルの『現代ギリシャ民謡』を読むよう勧めたが、それを機にギヤスケルの「現代ギリシャ民謡」が『ハウスホルド・ワーズ』誌に掲載されたこととシッパーズ氏は推察している。これにはオスマン・トルコのキリスト教者を援護する目的があったといえる。ギヤスケルは、宗教的あるいは人種的少数派を救うには時に他国の干渉も容認すべきであると考えていた。シッパーズ氏はギヤスケルの「現代ギリシャ民謡」のギリシャ人への擁護と、バーボルトがその詩「コルシカ」でジェノヴァ共和国統治下のコルシカ人の独立を願ったこととの共通性を指摘する。

更に、ギヤスケルは宗教への偏見を扱う「ユグノーの特性と物語」で、ユグノーの思慮深く、拷問の歴史を経ても精神性や愛情に溢れた特性を讃えているが、シッパーズ氏は、序章でも述べたように、ギヤスケルのユグノーの扱いは、バーボルトの思想を継承しているとする。バーボルトは『審査法・地方自治体法反対者への請願』(1790)において、英国の子供たちがキリスト教徒という枠を超え、世界を構成する一市民としての良心を求めるべきである、と主張している。「ユグノーの特性と物語」は海を越え『ハーパーズ・ニュー・マンズリー・マガジン』誌で海賊版が編集されて掲載されたが、この作品を通してキリスト者に対して、生きる上での心構えがユグノーの末裔も含むアメリカ人に向けて広く発信されたこととシッパーズ氏は論じる。

信仰と個人の良心の自由の問題は『北と南』にも引き継がれる。マーガレットの父ヘイルが牧師職を辞し北に移り住んでも、宗派を問わず信仰を深めること

が一番重要であり、イギリス人としてではなく世界市民としてのアイデンティティーが大切であったとシッパーズ氏は考察する。

第四章では、1858年から1860年のギヤスケルの作品が論じられ、ギヤスケルがニューイングランドの作家たちとの関わりを通して、非国教会派として過去の歴史を踏まえつつ、アメリカの公民権運動への関心を深めた点が考察される。この時期のギヤスケルの作品は、前述のプライスの『祖国愛についての説教』やバーボルドの『市民への説教』で重要視された、国家、政治や宗教を超越した市民の究極の目的とされる、キリストの説いた隣人愛や万人への慈善について描かれた作品が多い。

シッパーズ氏によれば、『ラドロー卿夫人』では、理想のリーダー像が追求されている。ラドロー卿夫人が教育を行うことは社会的なリーダーとして独自の「良心」に従うことであり、市民としての責任を果たすこととなるという非国教会の教義に根付いたメッセージが読み取れる。この作品は、民主主義的な社会への改善を求め、長子相続に基づく社会階層性を批判しており、英国のリーダーたちが社会情勢を鑑み改革することを促していると言える。ラドロー卿夫人の教育に対する偏見の批判と同時にフランス革命のもたらした残忍さも描かれ、フランス革命の暴徒にも理性を応用する能力が必要であったと、理性論者の視点を示した作品であるとシッパーズ氏は評す。

この後ギヤスケルの非国教会派の歴史を回顧する姿勢は「魔女ロイス」の1690年代のニューイングランドで、ピューリタンたちが何故殺し合いに至ったのかを英国人の目を通して物語ることに繋がったと氏は指摘する。「魔女ロイス」は英国のユニテリアンが清教徒を神格化せず、個人で正しい判断をするようコットン・マザーの例を通し警鐘している。「やっとならぬ調子」は『アトランティック・マンスリー』誌や『クリスチャン・イグザミナー』誌が当作品の宣伝したことを挙げ、この作品が米英両国民の市民教育の一端を担ったとする。また、「本当なら奇妙」の英国人のフランスでの祖先探しと、ギヤスケルの非国教会派の伝統的精神の探求とが重ね合わされるものの、伝統的な階級や制度に縛られる非現実性を描いているとする。

ギヤスケルのアメリカのユニテリアンとの関連においては、ニューイングランドのユニテリアン、マリア・スザンナ・カミンズの小説『メイベル・ヴォーン』

(1857) の編集に携った事がこの時期の作品の執筆動機となったとシッパーズ氏は述べる。氏は『メイベル・ヴォーン』のギヤスケルの『北と南』との構造的な類似点を指摘しながら、カミンズの描く、社会・宗教的にも優れたリーダー像はギヤスケルにも影響を与えたと推察する。『メイベル・ヴォーン』の序文でギヤスケルが述べるように、小説の大陸間での交流が英国人の平等な社会への共感を呼び起こすことを望んでいるとする。

第五章では『シルビアの恋人たち』など 1863 年のギヤスケルの作品を通してアメリカの奴隷解放宣言と南北戦争の余波によるマンチェスターでの綿花飢饉に直面した彼女の「市民」育成のための意識の高まりを論じている。

評論「まがいもの」が寄稿された『フレイザーズ・マガジン』誌は知的階層向けであったが、シッパーズ氏によれば、この作品や短篇「クランフォードの鳥籠」はバーボルドが 1804 年にジョゼフ・アディソンとリチャード・スティールの随筆集を編集した事が下地となっている。バーボルドがアディソンらの作品を通して社会に市民としての自覚を持つように説いたように、ギヤスケルも女性の自由を奪うクリノリンを着用するフランス上流階級の革命前のファッションを揶揄し、着飾らず流行を追わない市民を育成している。サムエル・スマイルズの『自助論』が求めた自己の成功よりも自己啓蒙や自助精神が市民としての責任を果たすため重要であることは、『従妹フィリス』においても明らかであるとする。

更に、シッパーズ氏は「ロバート・グールド・ショー」にふれ、ピューリタンの精神あふれるショーがギヤスケルを魅了したのは良心を持って南部の戦線に立ち、「義務」の下に亡くなったからであり、そのため訃報の形式で読む読者に不正に立ち向かい全世界の人々の自由な状態への行動を呼びかけていると解釈する。

結論においてシッパーズ氏も述べるように、本書はユニテリアン理性論者たちの思想を背景に、作品を楽しみながらも、良き市民形成のための「教え」を強調できる短篇を中心に、作品や掲載した定期刊行物の購読者、歴史的事象との結びつきなどを包括的に論じており、大変示唆に富んでいる。他方、18 世紀理性論者の中でもプライスやプリーストリーまたバーボルドらの主張はスコットランド啓蒙哲学の継承の程度などそれぞれ異なる事、バーボルドが 50 巻に及ぶ英国小説集の編集と考察を行った事も含めて論じられると、ギヤスケルの作品の特徴の

議論に深みが増すと思われる。尚、本書では本学会会員矢次綾氏の著作の引用や、冒頭で閑田朋子氏への謝辞があり、本学会会員の世界的な活躍を垣間見ることができた。

(聖心女子大学非常勤講師)